

詠歌における心

—「有心躰」によせて—

On the Heart and Soul of Waka Composition

“Ushin-tai” by Fujiwara no Teika

黒田智子 武庫川女子大学 教授

Tomoko Kuroda

Professor,
Mukogawa Women's University

はじめに

和歌（以下「歌」と表記）によって、人はひとつの情景を想い起こし、その中に浸ることができる。僅か31文字が、確かな空間性を実感させるのだ。そんな歌を詠むに際して守るべき条件は、上の句の5, 7, 5と、下の句の7, 7の字数のみである。空間性の表現形式としては、最小限の部類だろう。

小倉百人一首（13世紀前半）の撰者で知られる藤原定家（1162-1241）は、歌聖といわれ、詠歌についての言説が、後世において度々引用された。また、歌だけでなく、中世以降の連歌、能楽、茶道、書道など日本の伝統文化に大きな影響を与えた。特に、『毎月抄』¹⁾（1219）は、歌を成立させる必須の条件を詠み手の心の在り方に求めた、日本文学史上初めての歌論である²⁾。定家は、その中で歌を10の類型に分類している。そして、最も基本の躰を有心躰と名付け、歌の本質を論じている。同じく定家による歌論『近代秀歌』（1221頃）、『詠歌大概』（1222頃）とともに見ていきたい。

最初、『毎月抄』は、筆に任せて書かれ、全体に理路整然としていないように感じた。例えば、有心躰の特徴は、それを含む基本の4躰の説明では、素直・優美のみであるのに、10躰すべてを説明した後には、味わい深さを加えている。それは、定家が、歌人であって理論家ではないからだと考えていた。

定家には、毎月詠んだ100首を送ってきて指導を受ける身分の高い相手がいた。『毎月抄』は、評価を終えて100首を送り返す時に、それに添えた文章とされる³⁾。そこで、そのような師弟関係を想定して読むと、まず、定家が、相手の詠歌の素直さを大いに認めていることに気がつく。次に、基本とする4躰の説明において、優美への興味関心を呼び起こし、最後に、深い味わいに注目させている。相手の立場に立って、相手が定家のアドバイスを受け入れ易く、理解し易いような説明の順序を採った創作論なのだ。定家の態度は、現代の我々が考える論理性とは別次元において、精緻で、しかも温かく、優しい。

1. 歌の本質と役割

1-1 素直・優美・味わい深さ

歌は、古来より詠まれ、今なお多様に詠みうる。『毎月抄』において、定家は、歌を10種類の躰つまり類型に分けている。その中で、歌にとって欠くことのできない本質を備えているが故に、最も重要である躰を有心躰と名付けた⁴⁾。それ故に、有

心躰は、他の9躰にも及ぶ。この場合の歌の本質とは、歌を享受する側つまり受け手に与える感じ、印象、感動である。具体的には、素直・優美・深い味わいをあげている⁵⁾。

ここでいう優美とは「やさし」で、当時は、優艶つまり、穏やかで素直な美しさ、または、女性的な優美さを意味した。一方、定家自身は、もっと広い意味に用いているとの藤原春男らによる示唆がある⁷⁾。いずれにしても、「やさし」が歌に欠くことができない本質である以上、定家個人のいわゆる好みには留まらず、何らかの普遍性を与えていると考えられる。

定家が生きた時代は、平家滅亡から鎌倉幕府の成立、そして承久の変を含んでいる。貴族から武士へと政治の担い手が移行していく過程に、自然災害と飢饉が頻発した。これまでの価値観が揺らぐ乱世にあって、定家は貴族文化として受け継がれて来た歌道を家業し、後鳥羽院（1183-1198）とも、慈円（1155-1225）とも、源実朝（1192-1219）とも関わった。官僚としては中級に位置したが、背景の異なった文化人から、歌人として、一目置かれる存在だったのだ。歌合では自らも詠歌し、人々の歌の優劣を判定し、勅撰でも私家でも歌集を編纂し、次代の若者を指導した。

その定家が、人の心に第一に働くべき歌の効果を、有心躰に託して語っている。素直・優美・深い味わいとは、当時にも後世にも欠かせないと定家が考えていた歌の役割なのだ。

1-2 10躰の特質と関係

歌の10躰の中で、有心躰と共に基本となる3躰がある。それぞれの特徴は、崇高への志向性が感じられる（幽玄躰）、意味内容がなるほどと思われ確かさが感じられる（事可然躰）、表現に均整・調和などの整った感じがする（麗躰）、である⁸⁾。これら3躰は、有心躰のもつ素直・優美・深い味わいと重なり合いながら聞き手にもたらされる。つまり、有心躰は、独立した躰でありながら、これら3躰に含まれ、各々が有心躰のバリエーションでもある。

基本の4躰を自由に詠みこなせるようになれば、残りの6躰は詠めるという。その内の5躰の特質とは、声調の緊張を保ち、流麗感が強い（長高躰）、視覚的な描写が目立つ（見躰）、題に基づく場面構成（趣向）が知性的で巧みに行われている（面白躰）、着想の珍しさが目立つ（有一躰）、複雑な修辞技巧によって情趣美を濃厚にする（濃躰）、である⁹⁾。

キーワード：創作論、歌の本質、古歌、主体性、藤原定家

これらは、技法的な効果であることが共通している。そのような効果は、基本4躰の修得によって、自ずと身につくというのである。

芸術であれデザインであれ、何かを創作し表現する分野では、技法の修得に忍耐強い努力が必要だ。技法が高度であればあるほど、本来の目的との区別が曖昧になってしまうことがある。受け手もそちらに目が行きがちかも知れない。しかし、定家は、『毎月抄』の読者が歌の類型を知る過程で、歌本来の目的は、効果を多彩にするためではない、あくまでも、素直・優美・深い味わいであると了解しやすいように、順に説明しているところが注目される。

最後に残るのは、鬼拉躰である。これは、意味内容や詞使いに強さや恐ろしさが感じられる躰である¹⁰⁾。簡単には修得できない難しい躰だが、前述の様な順序で修得すれば、やがて必ず詠めるようになるという。修行の出发点としての有心躰から、究極の目標としての鬼拉躰への道程は、あたかも、貴族から武士へと担い手が移行する時代背景に重なる。一方、歌の分類としては、基本としての有心躰と、究極のバリエーションとしての鬼拉躰という関係である。素直・優美・深い味わいの表現を確実に修得すると、その中でも、特に優美とは対極にあるような強さ・恐ろしさをも表現できる、という定家の主張が認められる。

一方、受け手の立場からすると、素直・優美・深い味わいを確実に備えてこそ、強さ・恐ろしさをも抵抗無く受け入れ、歌として楽しむことができる、ということではないかと思う。貴族、武士という階級の違いとは別に、鑑賞する側に立つ人の心についての定家のとらえ方として注目される。

2. 詠歌の心構え

2-1 良い歌への執着と無心による深い境地

定家によれば、有心躰を修得すれば、そのバリエーションである他の9躰も、必ず詠みこなせるようになるという。しかしながら、有心躰を修得するのは、極めて難しい¹¹⁾。いわゆる基本・本質の例に漏れないようである。あれこれと努力し工夫するといった程度では少しも詠めないというのである。

まず、心を十分に澄み切った状態にしなければならない¹²⁾。「有心」躰と名付けているが、心が浄化されて邪念がなく、その意味では「無心」でなければならないのだ。次に、ひとつの深い境地に、自己の心のすべてを没入し沈潜させなければならない¹³⁾。そのような境地に「心が有る」ことが、有心躰を詠むときの必要条件といえるだろう。当然、詠み手としては、そのような境地を求め、懸命に目指したくなるだろう。しかし、定家は、それを意識的に狙いすぎると、返って見苦しい歌になる危険があると注意を促している。また、たとえ心が、深い境地に到達したとしても、必ず有心躰を詠めるとは限らない。それどころか、「稀に詠めることがある¹⁴⁾」というような躰なのである。

これほどまでに修得が難しい有心躰であるから、修得には、それなりの覚悟が必要である。定家も、和歌の道を歩む者の心

構えとして、少しでも良い歌を詠もうと努力し、その場限りのいい加減な気持ちで歌を詠むことがあってはならないと戒めている¹⁵⁾。それに関しては、強く執着するべきであって「無心」ではいけないのである。

2-2 景気之歌

なんとか有心躰を修得した後も、どうしても有心躰が詠めなくなる時があるという。それは、気が塞いで、意識が散乱しているような場合である。誰にでも、このような心の状態になることはあるだろう。定家は、具体的な対策を示してくれている。決して冥想や気晴らしの散歩を勧めているのではなく、定家自ら「景気之歌¹⁶⁾」と名づけた歌を詠むのである。それは、一首全体や、詞の使い方に、「そそめく」つまり、心が何となくざわめいて活気づき、波立つような¹⁷⁾、深さはないけれど、無難な歌である。4、5首から10首も詠むと、鬱陶しい気分が晴れて、精神の働きが整い、本来の有心躰で詠めるのだという。つまり、「景気之歌」を詠むことによって、閉じていた心を開き、散乱した心を澄んだものにする。それだけでなく、同時に、心と詞の間の途絶えてしまった回路を復活するのである。

歌聖といわれた定家だが、自分への評価は誰よりも厳しく、如何に詠むかに苦心していた。また、普通の人々と同様、仕事、家族、家計、病気など日常的な悩みで心が塞ぐことも度々だった。常に厳しい評価に晒されながら即興で詠まなければならない場合など、相当苦労したと想像される。「景気之歌」は、自らの経験から定家が編み出した、有心躰を常に詠めるようにするための有効な対策なのではないだろうか。

2-3 詞に対する心の優位

有心躰については、詠み手の心の在り方が必要条件である。その一方で、歌は人の心を動かす力がある。それは、詞の力を基盤とする。言霊という単語があるくらい古代には大きな力とされた。したがって、詠み手にも強く働く力だと考えられる。定家の場合、心と詞は、究極にはどちらが重要なのだろう。

定家の答えは、明快である。まず、心と詞の両方が優れているのがよい歌だとして、歌における心と詞を鳥の翼に喩えている¹⁸⁾。つまり、心と詞は、一対にして一体の関係なのである。それを前提として、詠み手の心に適合した詞の選択と、その配置が重要だとのべている。そして、本来、詞に善し悪しはなく、強弱大小があることを良く見定めるべきだともとのべている¹⁹⁾。そこには、詞の力に振り回されない主体的な判断と、その意味で詞に対する心の明らかな優位があり、注目される。

しかしながら、心と詞の両方が優れているのは理想であるだけに、いつも可能とは限らない。定家は、その現実を認め、ではどちらを取るか、についても明快である。さすがに、詠歌の実践をし尽くしただけのことはあると思う。心が欠けている歌よりも、詞がうまく用いられていない歌の方を選ぶとのべている²⁰⁾。

つまり、定家は、詠歌の際も、その評価においても、詞より心を大切にしている。定家の歌は、しばしば技巧的と評される

だけに、意外なほどである。もしも、心と詞が鳥の翼のように一対であることが前提とすれば、定家の心は、彼の詞以上に技巧的とみえるほどに緻密な世界をもつことになる。それは、先に見たように深い境地において、が前提となろう。実際、定家は、『毎月抄』において、秀逸な歌の心は、深く、「巧み」であるとのべている²¹⁾。どのようにして、心の中にそのような世界をつくり上げることが出来るのだろうか。

3. 古歌に学ぶ

3-1 時代の限定

『詠歌大概』で、定家は、古歌を繰り返し味わって、その歌が持つ世界に自分の心をひたらせることを強く勧めている²²⁾。つまり、古歌の空間性に深く浸るということであろう。同時代に世間で認められた歌ではないことに注目したい。そうすれば、師匠は不要であるとまでのべている²³⁾。それは、師匠が全く存在しなくて良い、という意味ではない。『毎月抄』では、素質を伸ばしていくための、良い意味で個性にあった指導を受けることが大切だとのべている²⁴⁾。指導を離れた後も、歌を詠み続ける限りは継続して古歌に学べということであろう。定家自身、父の俊成(1114-1204)の教えを度々引用している。しかし、父亡き後も、定家は、次々に歌を詠まねばならない。その時に、最も頼りになるのは、古歌だったのである。

『毎月抄』では、手本を求めて、どこまでも古き時代を溯るのではなく、『万葉集』(8世紀後半)以降の歌に限っている²⁵⁾。『万葉集』は、『古今和歌集』(905)とほぼ同時代に編纂されたとする説もあるが、歌自体は、もちろんそれより古い。この『万葉集』を学ぶにあたり、定家は、条件をつけている。初心者には、学ぶべきでなく、また、学ぼうとしても学べるものではない。その一方で、稽古を重ねて基本の有心躰を修得し、同時に自分にふさわしい躰を身につけた後は、『万葉集』を必ず学ばねばならないというのである²⁶⁾。この条件付けは、二つの要因から来ると思われる。一つは、初心者が素直な気持ちで詠い出そうとする時、『万葉集』は、手本としたくなるような歌が収められていることだと思われる。もう一つは、万葉の歌人の心の様態が、同時代の人々とは比べものにならないほど浄らかであったと、定家が考えていたことである²⁷⁾。

先にみたように、有心躰を詠む際の深い境涯には、無心でないが入っていけない。つまり、初心者と稽古を積んだ者との心には、浄らかさに差がある。当然、初心者は、万葉の歌人の浄らかな心に近づくことはできず、従って、真に万葉風の歌を詠むことはできない。一方、有心躰を身につけた者は、それだけ心を澄ませる修練が出来ているから、万葉の歌人の心の状態に近づくことができる。しかし、この場合でさえ、定家は、日常的な語句や散文的表現で詠んではならないと戒めているのである²⁸⁾。素直の度が過ぎて、あまりにも日常感覚で詠んでしまわないように警告しているのだ。ここには、初心者、稽古を重ねた者、『万葉集』のそれぞれの歌に顕れた素直さに対する、定家の明確な区別が見て取れるように思う。心の浄化の度合いが素直の質の違いである点が注目される。

同時に、定家は、稽古を重ねた者が万葉風を詠もうとする時、素直であるが故に顕れた生の感じによって、優雅さが欠けないようにと警告している²⁹⁾。万葉歌人の心の圧倒的な浄らかさに倣おうとする場合、歌の本質の一つである優美さを見失う危険性があると定家は捉えている。

もし、時代を遡るほど、人々の心が浄らかであるならば、参照すべき古歌の時代として最も新しいのはいつだろう。『毎月抄』では、定家は特に限定していない。しかし、『近代秀歌』では、本歌取りなどのために参照すべき時代について、11世紀末以前とする³⁰⁾。つまり、『毎月抄』が書かれた時期から約170年前である。一方、『詠歌大概』では、最近70年から80年の間で詠み始めた詞は、決して自作に用いてはならないとしている³¹⁾。この限定には幅があるものの、仮に当時の平均寿命を50歳とすると、参照すべき対象が3世代以上前であることが注目される。つまり、生前の詠み手はもちろん、その子・孫とも時代を共有しない可能性が高いのである。係累・仕事など現実の人間関係に影響されずに参照できる限度ということであろうか。

3-2 判断の主体性—基盤としての心と生活

定家は、読むべき歌集として、『古今和歌集』、『後撰集』(10世紀半ば)、『拾遺集』(1006頃)、『三十六人集』(1110頃)、物語として、『伊勢物語』(10世紀前半)、『源氏物語』(11世紀初頭)を推薦している。しかし、それらに載っている歌ならすべて良いわけではない。必ず、優れた歌人の歌に限ると断っている。例えば、三十六歌仙の中では、柿本人麻呂(660-720頃)、紀貫之(866-945頃)、壬生忠岑(860-920頃)、伊勢大輔(989-1060頃)、小野小町(825-900頃)などをあげている³²⁾。また、世間では評価されていても、その歌人のすべての歌が優れているわけではない。それを鵜呑みにして、振り回されてはならないとも注意している³³⁾。特に『毎月抄』では、寛平時代(889-898)以降の優れた歌人の歌について、歌の善し悪しを判断できる人が本当に歌の価値の分る人だとのべている³⁴⁾。詞と同様、やはり歌についても、主体的な判断や評価をする力を持つことが、大切なのである。

定家は、放蕩を尽くしたことで知られる20歳ほど年下の後鳥羽院に仕えていた。院が設けた和歌所に務め、『新古今和歌集』(1205)の撰者の一人でもあった。また、院による歌会において歌を詠み、歌合わせでは善し悪しを判定した。当時は、身分秩序や礼儀作法が、現在とは比べものにならないほど社会を規定していた時代であった。一方で、乱世にあっては貴族の生活に経済的なゆとりがなくなり、有職故実もまた、本来なすべきようになされないことがあった。そんな場合、定家は、それを正す立場をとっていたのである。後鳥羽院の言説を集めた『後鳥羽院御口伝』には、辛辣な定家評が登場する³⁵⁾。自己の考えを通すと到底切り抜けられないような難局に、度々遭遇したと思われる。悩みを伴う自己判断を、主体性を磨く機会としたと推測される。

『毎月抄』で、定家は、秀歌について、詞が通常意味する境

界線を越えて余情が漂うだけでなく、「心が真っすぐで、衣冠をきちんと身に付けている人を見るようだ」とのべている³⁶⁾。正直に生き、正しい生活を心掛けた定家の理想が、そこに投影されているように思われる。歌人である定家には、当然溢れ出す思いがあるだろう。歌人であるがゆえに、その思いが詞として溢れ出すことのみ、何よりも真っすぐでありたいだろう。有職故実の決まりごとは、そのような思いを貫く妨げになるのではないかと思う。しかし、定家は、それを蔑ろにせず、むしろ尊重し節度を保つことを大切にしている。初心者に対しても、詠歌の際、姿勢を正して座る³⁷⁾ことを勧めており、一貫している。詠歌の素直と生活の節度が、定家独特の共存を示すように思う。

定家は、仮名による先の古典だけでなく、真名による『白氏文集』(845)も推薦している。当時、「和」の歌に対する「漢」の詩を、歌に取り込むこと(本説取り)は、避けるのが習わしだった。しかし、定家は、時々ならば、歌の趣向に変化が得られるとして肯定している。そして、漢詩を深く詠み味わうことで、心を気高く澄み渡らせることができるという³⁸⁾。さらに、漢詩を通じて、自然の移り変わりや、世の栄華盛衰の本質を知ることができるためだという³⁹⁾。それによって、詠歌のための主体的判断の基盤を培うことができるのである。つまり、歌の趣向の変化、心の浄化、主体的判断がまず重要であり、詠歌に関する決まりごとはそれよりは下位に位置付けられている。この点では、むしろ前衛的である。若い頃から詠歌に打ち込み、源平の戦いにさえ心を向けなかったことが日記から知られる³⁹⁾。官位の昇進が遅い中にも、焦らずに歌の道を極めた要因でもあろう。

3-3 沈潜の条件—「成りきる」

本歌取りでは、古歌の中でも良く知られ名歌とされる歌から、そこに用いられた句を、それと分かるように引用する。当時、教養を身に付けて詠歌の技法を磨くために、古歌について知ることは重要であった。定家の場合は、『詠歌大概』において、表現においては古歌の詞を用いるべきだが、内容においては、何よりも新しく、誰も歌ったことのない情感を求めている⁴⁰⁾。古歌に沈潜することは、そこに歌われた心に浸ることであり、新しい情感とは矛盾するようにみえる。それにも関わらず、古歌への沈潜が、詠歌の稽古に欠かせないのはなぜだろうか。

定家は、良い歌を詠む場合の心の持ち方について、具体的なイメージを語っている。例えば恋の歌を詠む時には、平凡な自分を捨てきって、『伊勢物語』の主人公・在原業平の振る舞いを思い起こし、自らを業平と思って詠む。地形を詠むには、日常生活で見慣れた庭を離れる。そして、玉を敷いたように美しい石畳や山川の景色などをイメージするのである⁴¹⁾。つまり、普段の自分とは全く別人になり、自分が置かれているのは極端に異なった環境を思い浮かべ、そこに没入するのである。それは、想像力を限界まで働かせて、自分以外の何ものかに成りきることである。この時の心の状態こそが、有心躰における深い境涯なのではないだろうか。

特に、業平に成りきるところが目される。定家は、恋の歌を得意としたが、自らの恋愛体験についての記録は乏しい。能・『定家⁴²⁾』(1524頃)における式子内親王との恋物語も、後世の創作とされるようだ。定家による恋の歌は、自分が業平になったのか、業平が自分になったのか分らないほど業平に成りきることを通じて生まれたものなのだ。自らの経験は基盤であろうが、むしろ『伊勢物語』や『源氏物語』において、業平や光源氏に入我入することによるのではないか。

西行(1118-1190)のような出家した僧侶が、出家後も恋を詠んでいる事実を考え合わせ、このことは、定家のみ特別ではなかったと考えられる。歌枕を詠む場合も同様で、必ずしも、名所とされる場所に行く必要はない。現実の体験とは別に、競って日常生活から離れることは、歌における悦びの一つだったと思う。

しかし、それを意識的に行いながら、詠歌の方法として磨き抜いていくところに、定家らしさがあると思う。なぜそこまで、「成りきる」ことにこだわるのか。

3-4 心と詞の回路の深さ

ひとつには、定家が職業歌人であるためだと思われる。誰よりも良い歌が詠めて当たり前という立場にある。一方、自らが詞に対する心の優位を説く以上、誰よりも心を培わねばならないことになる。心においては、身分の上下、性別、年齢を超越していなければならないのだ。

また、定家の周囲や、過去の歌人の中に、秀歌が多いわけでは無いが、時として生き方が滲み出るような歌を詠む人が少なくなかったと思う。例えば、在原氏の学問所として大学別曹奨学院を創設した在原行平(818-893)は、古今和歌集に4首が撰ばれている。弟の業平(825-880)の30首に比べ、少ない。しかしながら、ある事件に関係して須磨にこもっていた時に彼が詠んだ歌⁴³⁾は、後の『源氏物語』に須磨という土地のエピソードとして取り上げられているほどである⁴⁴⁾。定家は、その歌を『近代秀歌』にも、『詠歌大概』にも撰んでいる⁴⁵⁾。定家は、職業歌人として、そのような歌の心をも包括するような自己の心の世界を築くことを自らに課していたのではないだろうか。

一方、定家は、古歌には、同時代に望めないような優れた歌が多いとのべている⁴⁶⁾。それは、詠み手の心が優れていた証である。そこで、心を培うためには、過去の優れた歌人の心に成りきることが、最も有効だと判断したのではないだろうか。彼らの生きた時代を知らない以上、それは容易なことではあるまい。定家自身、何度も繰り返し過去の歌人の心を知ろうとした。そして、それらを読むだけでなく、写している。それは、単なる記録や、家業のための資料作成だけが目的とは思えない。晩年の定家は、『摩訶止観』をはじめ写経の頻度が多くなる⁴⁷⁾。あたかも仏の心に近づこうと写経するように、過去の歌人や物語の主人公の心に近づこうと、『古今和歌集』、『伊勢物語』、『源氏物語』を写しているように思えてくるのである。

もうひとつは、有心躰と「景気」に、その鍵があると思

う。有心躰は、何とかして心を澄ましてある境地に心を没入させたとしても、稀に詠むことしか出来ない。では、どうやって、深まった心の状態を、詞に表現するのか。先にみたように、心の浅い所で心と詞が繋がっている「景気之歌」は、それによって詠み手の心の回復し、同時に、心と詞の回路を復活した。有心躰の修得とは、そのような回路が、深い境地に置いて開かれていることを指すと考えられるのではないか。

『毎月抄』で、定家は、多くの人が、飾り気がなく、さっぱりしており、深さはなく、声調に伸びやかさのある歌だけを秀歌と称している事実を指摘している。そんな歌なら、誰でも詠めるとさえ言っている⁴⁷⁾。それは、「景気之歌」と同様、心の浅いところで詞との回路が開かれているに過ぎないのであろう。

小さな子供は、周囲の人々の会話を聞くことによって、言語を覚える。文法から入る訳ではない。定家が提示した古歌は、すでに深い境涯で心と詞の回路を開いた優れた歌人による。その歌の世界に何度も浸ることによって、自らの心にも、次第に相似の回路が開かれることを、定家は経験を通じて自覚していたのではないだろうか。

4. 結び

歌における心と詞は、一対にして一体の関係である。それを前提として、定家は、詞の力に振り回されない主体的な判断と、詞に対する心の明らかな優位を説いている。したがって、歌の基本である有心躰の修得には、それを詠むだけの心を培うことが並行して必要である。有心躰がもつ歌の本質のうち、特に、素直・深い味わいは、心を浄らかに澄ますことによって、修得の可能性が開かれる。そのためには、生活の節度と社会や自然の背後にある本質の探求を心掛ける必要があると考え、実践を目差した。

さらに、優美を合わせた3つの本質は、相互補完的に働くのでどれも欠くことができない。それらの修得には、古歌に学び、かつてそれを詠んだ歌人の心になりきって、時間を越えて、繰り返し古歌が現出する空間に沈潜することが必要である。その結果、自らの心は、階級、性別、年齢などを超越していく。定家のいう「やさし」とは、そのようにして取得する質であると考えられる。

こうして心を培った歌人は、表現者として「現在」を生活する自らが受ける感動やテーマ(題)に最もふさわしい詞を選ばねばならない。定家は、古歌の世界に浸ることで、心の深い境涯において、そのような選択の回路を構築したと考えられる。日常の出来事で心が乱れ、塞ぎ、回路が閉じて、浅い所で回路を復活するのが「景気之歌」の役割であろう。詠み手は、それによって、自らの心深くにつくり上げた回路を復活させ、詞を通じ歌によって、受け手へ向けての表現が可能となる。繊細ではあっても確かに存在する心と詞の関係である。有心躰創造の回路であり、すべての歌の回路なのかも知れない。

謝辞

1年半程前に、恩師・相川浩先生が主催される研究会で、定家の歌論に出会った。『万葉集』、『古今和歌集』、『新古今和歌集』の歌に覚えた中学生の頃の感動に再会すると共に、それが、空間性の実感であることを認識した。同時に、定家について漠然と持っていた、技巧と理知の歌人というイメージが刷新された。創作論としての歌論と建築論の関係を説かれる先生の熱意に打たれ、自らも定家の考え方を理解してみたいと考えようになった。本学生生活美学研究所主催の定例研究会(2015年5月30日)で、先生に『侘茶の素因』と題するご講演を頂いたことを切掛けに、特に有心躰についての興味が深まった。そのことが、本論をまとめる大きな動機となった。相川先生をはじめ、ご関係の皆様深く感謝申し上げます。

注釈および参考文献

1) 定家の死後、偽作歌論書(鶉鷺系歌論など)が数多く出まわった。

『毎月抄』についても議論があったが、現在は、定家に依ると考えられている。以下の文献に要約されている。

- 藤平春男、藤平春男著作集 第1巻、笠間書院、1998、p.205、1.6-12
- 2) 藤平春男、藤平春男著作集 第3巻、笠間書院、1998、p.211、1.14,15
- 3) 1)、p.204、1.15,16
- 4) 橋本不美男他、歌論集、小学館、2006、p.495、1.9,10
- 5) 4)、p.494、1.14、p.495、1.14
- 6) 4)、p.636、下段、1.6-8
- 7) 4)、p.636、下段、1.17-19
- 8) 4)、p.494、1.14-16
- 9) 4)、p.494、1.15、16
- 10) 4)、p.494、1.16、p.495、1.1、2
- 11) 4)、p.495、1.11
- 12) 4)、p.495、1.12
- 13) 4)、p.495、1.12,13
- 14) 4)、p.495、1.13
- 15) 4)、p.496、1.3、4
- 16) 4)、p.497、1.3、4
- 17) 「そそめく」は、ざわざわする、の意
- 18) 4)、p.499、1.5-9
- 19) 4)、p.498、1.1-8
- 20) 4)、p.499、1.10、11
- 21) 4)、p.501、1.4
- 22) 4)、p.475、1.3
- 23) 4)、p.475、1.13
- 24) 4)、p.505、1.7-15、p.506、1.1、1.9-11
- 25) 4)、p.493、1.10、11 『詠歌大概』では、『万葉集』は含まない。
- 26) 4)、p.493、1.14-16、p.494、1.1-3
- 27) 定家は、「今回の100首には、かなり万葉風が多く見られる」と指摘している。4)、p.494、1.6、万葉の歌の心の浄らかさについては、4)、p.493、1.14
- 28) 「俗に近く」p.494、1.4

- 29) 「恐ろしげなるたぐひ」 p.494, l. 4
- 30) 本稿では、定家がいう「近き世」とは、後拾遺集（1087）から千載集（1188）までを指すとの立場をとる。したがって、それより前とは、11世紀末以前と考える。 p.449, l. 14
- 31) p.473, l. 8
- 32) 『詠歌大概』では、『源氏物語』の記述はない。 4), p.475, l.3-5
- 33) 4), p.507, l.2-9
- 34) 4), p.507, l.9-11 894（寛平 6）年、菅原道真の建議により遣唐使が中止され、漢詩が盛んだった唐風文化に終止符が打たれた。それ以降、国風文化が育ち、初めての勅撰和歌集である『古今和歌集』（905）が編纂された。
- 35) 「傍若無人、理も過ぎたりき。他人の詞を聞くに及ばず。」「一すぢに彼卿がわが心に叶はぬをもて、左右なく歌見知らずと定むる事も偏執の義也」など。
- 36) 4), p.500, l.12, 13
- 37) 4), p.509, l.8, 9
- 38) 4), p.508, l.2-10
- 39) 堀田善衛, 定家明月記私抄, 筑摩書房, 1986, p.13-16
- 40) 4), p.475, l.3
- 41) 藤平春男, 藤平春男著作集 第 4 卷, 笠間書院, 1999, p.301, l.8, 10, 『京極中納言相語』より
- 42) 作者は金春禅竹, 古く「定家葛」ともいった。
- 43) わくらばに 問うひとあらば 須磨の浦に 藻塩たれつつ わぶとこたえよ (古今 962)
- 44) 「行平の中納言の, 「藻塩垂れつつ」侘びける家居近きわたりなりけり。」阿部秋生, 源氏物語 上, 小学館, 2008
- 45) 近代秀歌 5, p.458, 詠歌大概 6, p.486
- 46) 4), p.500, l.8
- 47) 稲村栄一, 訓注明月記 第 4, 5 卷, 松江今井書店, 2002
- 48) 4), p.500, l.13-16